



▲奥州白石温麵協同組合理事長の佐藤さんが温麵を自らゆでた後、めんについて紹介した



▲白石区から持ち込んだ具で作った「白石鍋」(左)と白石市名産の「白石温麵」が配ぜんされた



▲交流会会場では、JR東日本とJR北海道の両白石駅の姉妹駅調印式が行われた。進行役の中学生たちの言葉に涙を浮かべる人がいたり、両駅長に対する質問に会場が沸いたりするなど、参加者を感動させるセレモニーとなった



▲「市民を代表し心から歓迎します」と川井白石市長があいさつ



▲特産の白石和紙の上に、互いに交流の思いを寄せ書きした



▲会場には、白石市民31人が訪れ、交流を深めた



▲かつて姉妹駅のことを調べた柏丘中学校2年の細川早未さん、佐藤悦子さん、田中紫織さん(左から)



▲両白石駅長が署名押印した姉妹駅締結書を披露すると、会場から大きな拍手が送られた

になったものである。

白

石市に入り最初に向かったのは、白石城主の片倉家の菩提寺である傑山寺。この寺には初代片倉小十郎景綱の墓などがあり、住職が境内を案内してくれた。また、白石城では天守閣を見学したり、歴史探訪ミュージアムで二代重長の物語を立体映像で鑑賞したりした。そのほか、碧水園や弥次郎こけし村などを見学し、白石市の歴史や文化に触れた。そして、市内の公民館で昼食を兼ねた白石市民との交流会が開催され、姉妹駅の調印式も行われた。

遠

いどころにきた気がしない。参加者たちは口をそろえたと。それは、白石市が開拓者のふるさとという理由だけではなく、市内の至る所で見掛けた「白石」という名称がそう思わせたのかもしれない。もしかすると姉妹駅復活という夢を実現させた子どもたちの姿に、自分たちが忘れていた何かを見いだし、そのことが懐かしさに結び付いたからかもしれない。

二泊三日の旅はひとまず終わった。しかし、白石市との交流の旅はこれからもさらに続いていく。

おばら 小原温泉



▲白石市の西部、白石川の上流にある温泉。約800年の歴史があり、今回の旅の宿泊地となった

やじろう 弥次郎こけし村



▲こけしは白石市の代表的な地場産業の一つ。この施設では、実際にこけしを作る工房を見学した

へきすい 碧水園



▲白石市に伝わる神楽などの伝統文化を継承するための施設で、この日は市民愛好家による謡曲を鑑賞した